

TAKE FREE

豊かな「音」の世界へ
Tales of sonic

BLUE+ GREEN JOURNAL

Okutama Town Official Magazine
奥多摩町公式タブロイド

04
fourth ISSUE

Artwork by 宮野のぞみ

東京・青梅や奥多摩でのフィールド活動をベースにしたフラワースクール「花あそび〜花寿庵〜」代表。奥多摩の森をイメージして製作したヘッドフォンは、この土地に植生するツヤゴケ、蔓（あけび）、テイカカズラを使用。「暑い日差しと雨風の中で、しなやかに伸びた力強い“蔓”。多くの命を育む大地のすぐ隣で生きる“苔”を使い、“いのちのリズム”を表現してみました」。

<http://flowertherapy.main.jp>

Tales of Sonic

豊かな、[音]の世界へ

木々の枝葉のささやき、頬をなでる風、滝の水音、そして鳥たちの多彩な歌声…。ふと耳を澄ませば、気づくだろう。都市の喧噪から遠く離れたこの町が、豊かな「音」の園であることに。さあ出かけよう、奥多摩の森へ。目に見えないヘッドフォンを片手に。自然が奏でる未知なる交響曲は、いつだって僕らの耳を愉しませてくれるから。

Sound Scape In A Forest

音の風景が紡ぐ、森林の未来

「Cyberforest」は、日本全国の森の音を楽しめるユニークなウェブサイト。北海道富良野や志賀高原、山中湖など、全国7箇所にライブマイクを設置し、ここで収録された音を誰でもリアルタイムに聞けるという仕組みだ。サイト上のボタンをクリックすると、パソコンから聞こえてきたのは鳥、蟬、水音、そして長い沈黙。異なる森の音を次々と聞いてみても、大きな違いはないようにも思える。なぜこのようなサイトを構築したのか、プロジェクトを手がけた東京大学の斎藤馨教授にその理由を聞いた。「あまり理由とか答えを見つけようとせず、聞くのが楽しいかな。もちろんデータを取るとか、そこからなにか大切なものを導き出すということも目的のひとつではある。でも、インターネットの中に自然がある、ということが一番のコンセプトなんですよ。遠くの自然の音をネットで聞けるという体験が積み重なってくると、なんとなく遠隔の天気が気になるようになったとか、次の週末はどこかへ行こうと考えるようになるかもしれない。こんな風にネットを通じて、生活の中にさりげなく自然が入り込んだら面白いでしょう、と」。楽しみ方は人それぞれ、と斎藤さんが言う通り、ちょっと想像しただけでも多様な面白味があることに気づく。鳥たちが元気に鳴き声を聞かせてくれる、いわゆるゴールデンタイム（日の出前や日没前後の時間）にひたすら彼らの歌を聴くのもいい。あるいは、都会にいる自分と大自然の落差を「音」で感じるのも面白いだろう。100年後に現在の森の音を聞いたとしたら、自分の耳を通じて100年のタイムスリップができるということにもなる。なにより、自然の音に耳を澄ますという行為がこんなにも新鮮であるということに気づかされるはずだ。「森や山を歩くという場合、やっぱり我々は視覚に頼りきりなんです。そして目に入ったものを他人に説明したくなる（笑）。でも音というのは口では説明できないし、頭を使わなくても自由に楽しめるもの。解説や知識がなくても、勝手に解釈して自分のなかで完結できる。そこに音の自由があると思うんです。だから自然のなかに入った時、視覚からの情報ばかりに頼るのはもったいないでしょう？ よくよく聞いていくと、同じ鳥でも地域によって微妙に鳴き声が違うことがあるし、時には意外な野獣の声が聞こえてくこともある。そういう発見が人それぞれにあると思うんです。たとえば同じ地点の音を10年前と今とで聴き比べ、鳥の種類や数の違いを体感することで、多くの人の自然環境への興味が深まっていくかもしれません。私たちはリアルタイムの森の音をひたすらアーカイブしていく。そして未来の人たちがこれをどう利用していくかを、私自身、楽しみにしているんです」。

森の中で目をつぶれば、聴覚がどんどん鋭敏になっていくのが分かるだろう。音が紡ぐ、過去、現在、未来の森林の風景。視覚に頼らない森歩きは、きっと新たな気づきをもたらしてくれるはずだ。

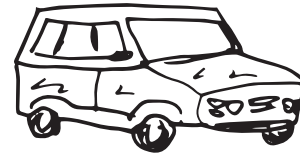
斎藤馨

東京大学大学院新領域創成科学研究科教授。専門は造園学、景観計画、環境教育など。約20年前に「サイバーフォレスト」を立ち上げ、日本各地の音の記録を続ける。



月夜見第一駐車場 奥多摩町川野

奥多摩周遊道路において最も眺望の良い場所のうちのひとつ。奥多摩湖、雲取山、国師岳など、多様な環境を一望できるのも魅力。まずはここで奥多摩の多様性を視覚的にチェックしつつ、野鳥の声にも耳を澄ませたい。



耳を澄ませる一日

白丸湖

奥多摩町白丸

カモ類やサギ類、トビなど大型の野鳥が集まる場所。移動せず、湖畔でじっとしていても音や風景を楽しめるスポットだ。



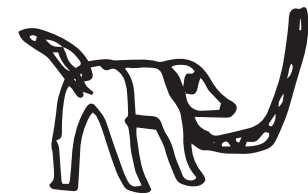
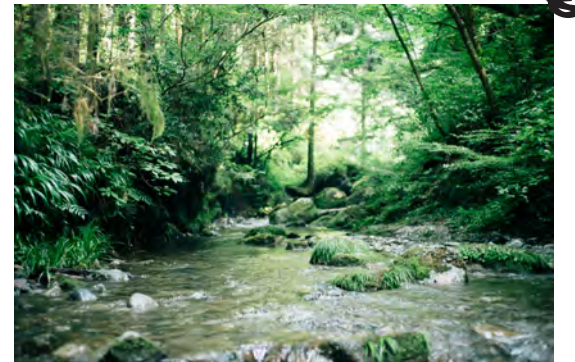
山のふるさと村 奥多摩湖いこいの路 奥多摩町川野

園内だけで120を超える種が記録されている。野鳥の宝庫。奥多摩で鳥の音を楽しむならまず訪れたい場所だ。湖畔、広葉樹の森、川の畔など、多様な環境を歩くことでできるので、視覚、聴覚ともに満足させられる貴重なスポット。宿泊も可。



寸庭～寸庭橋付近 奥多摩町小丹波

JR古里駅から歩いてアプローチできる美しい川辺のコース。BGMの水音がどんな季節にも耳に心地良い。奥多摩の中でも高度の低いエリアなので、高い山で聞こえる音との対比も面白い。



目まぐるしく変化する、森の音の世界

ある夏の日、僕らは奥多摩に広がる音の世界を堪能するため、山、森、川を巡った。ショートトリップの先導役は、奥多摩をホームグラウンドにインタプリターとして活動する田畑伊織さん。「音を愉しむ」というテーマで田畑さんに設定してもらったコースを、僕は耳を澄ませながら、ゆっくりと歩き続けた。

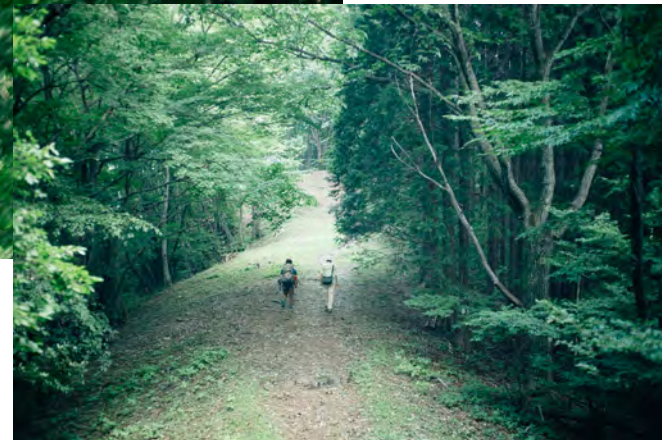
30℃を超える蒸し暑い午前中。まず、向かったのは奥多摩周遊道路の月夜見第二駐車場だった。車で坂を駆け上がると、いつの間にか外気が26℃になっていることに気づく。駐車場の標高は1090m。壮大な風景を眺めながら早速、耳に意識を集中させてみると、蝉の声にも音色の違いや抑揚があることにあらためて気づく。「ギー——」と途切れなく聞こえる蝉の声は、よく考えるとあまり聞き慣れない音色だ。「今、耳にしているのはエジゼミといって、これくらいの標高でよく聞こえてくる音。つまり、奥多摩駅あたり（標高343m）の蝉とは種類が異なるんです。高度が違えば気温も違うし、そこに住む鳥や虫、植物も少しずつ異なってくる。奥多摩の特徴は、急峻な山が多く比較的、狭いエリアでもこうした高度の差を感じられる点。だから少し移動するだけでも聞こえてくる音の変化を楽しめるわけです」。

そんな話をしながら次に聞こえてきたのはアオゲラの歌声。「キュウ、キュウ、キュウ」と軽やかで個性的な鳴き声は比較的覚えやすい音だ。アオゲラの声が途切れたあと、さらに耳を澄ましていると、カケスの声がある。その後、一瞬見事に静まり返ったと思うと、今度はまた、蝉の大合唱が始まった。耳に意識を集中させていると、音の世界が目まぐるしく変化していることにあらためて驚かされる。

そんな話をしながら次に聞こえてきたのはアオゲラの歌声。「キュウ、キュウ、キュウ」と軽やかで個性的な鳴き声は比較的覚えやすい音だ。アオゲラの声が途切れたあと、さらに耳を澄ましていると、カケスの声がある。その後、一瞬見事に静まり返ったと思うと、今度はまた、蝉の大合唱が始まった。耳に意識を集中させていると、音の世界が目まぐるしく変化していることにあらためて驚かされる。

月夜見第二駐車場～小河内峠 奥多摩町原

奥多摩町と檜原町の町村境の尾根。ここから小河内峠、惣岳山、御前山へと尾根道を歩くことが可能。高い標高ならではの虫、鳥の声を聞きながらの山歩きは格別。他の場所との比較、特に高度と音の関係に意識を向けるとまた面白いだろう。



Strolling With Birds

小鳥たちのさえずりに誘われて



Photo:
Masaki Okabe

ルリビタキ
人懐こい冬鳥。「キョロ
キョロキョロロ」と丸み
を帯びた声とともに近
寄ってきてくれる



アカゲラ

キツツキの仲間。木を
突くノミの音が静
かな森に響き、なんとも
心地よい



サンコウチョウ

夏の渡り鳥。「ツキ ヒ
ホシ ホイホイホイ」と
ユニークな鳴き方を
する。「月日星」なの
で「三光鳥」



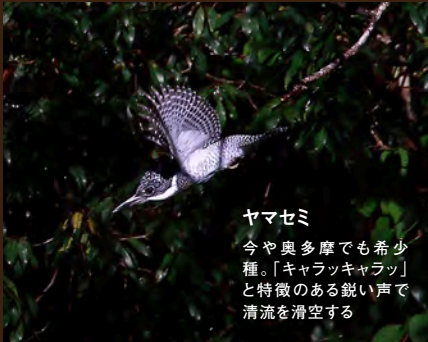
キビタキ

身近なアイヤル的夏鳥。
口笛を吹くと「ビィビィ
イ ビッコロロ、ビッコロ
ロ」と返してくれる



ヤマセミ

今や奥多摩でも希少
種。「キャラッキャラッ」
と特徴のある鋭い声で
清流を滑空する



メジロ

昔から日本人に馴染み
の深い鳥。聞かせるには、
「長兵衛 中兵衛 長中
兵衛」



アカハラ

「キョロロン キョロン
ツリー」と、とてもインパ
クトのある澄んだ声が特
徴の夏鳥



ソウシチョウ

「ビョッピョッピョッ チョ
ウーホイー チョーホイ
チョーホイ」と鳴く。とて
も美しいが、外来種



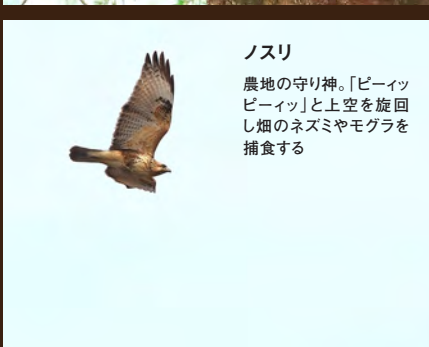
アオゲラ

日本の固有種。美しい
色と「ビョービョービョー
ビョー」と口笛のような
鳴りが魅力的



ノスリ

農地の守り神。「ピーッ
ピーッ」と上空を旋回
し畑のネズミやモグラを
捕食する



ツミ

日本最小の猛禽類。メ
スはハトぐらいの大き
さで「キキキキ」ととても
甲高い声で鳴く



ライフワークは野鳥撮影。 小鳥たちの楽園、 奥多摩の森を歩く日々

面積の約95%を森林が占める奥多摩町は、
野鳥の王国だ。絶滅危惧種の大形猛禽類ク
マタカや、バードウォッチャー憧れのヤマセミをはじめとする貴重な留鳥(※)たち。あるいは、美しい
瑠璃色をした初夏の風物詩、オオルリや、柔らかな
紅色が特徴の冬鳥、ベニマンコといった、季節
の訪れを告げる渡り鳥たちなど……。こうした希
少な野鳥たちが生息するとあって、バードウォ
ッチャーたちにも人気のフィールドなのだ。

JR鳩ノ巣駅から徒歩1分。創業42年の食事
処「鳩の巣釜めし」の店主、岡部正樹さんは、野
鳥撮影をライフワークにするアマチュアカメラ
マンだ。生まれも育ちも奥多摩という岡部さんが野
鳥の魅力に目覚めたのは、わずか数年前のこと。
息子の成長を記録するために一眼レフカメラを
購入したことで、写真撮影にハマった岡部さん
は、そのうち、被写体を求めて近所の森へ足を運
ぶように。今では開店前の早朝やお店の定休日
に、町内に点在する秘密のスポットへ、撮影に出
かけるのが習慣になっているという。

「その日のお目当ての鳥を1種類、多くても2種類
に定めて探します。やみくもに歩いて探せるもの
ではないので、餌や住処などの生態を調べてから
狙いをつけて探しますが、そのほとんどが観光
マップには載っていないような場所。こんなと
ころがあったんだ、と僕自身、驚くことばかりで、正
直、当たり前すぎて退屈に感じていた奥多摩の
景色が、野鳥撮影を通して一変したんです」と岡
部さんは話す。

野鳥撮影で重要な手がかりになるのが、鳥の
声だ。お目当ての鳥がいそうな環境を見つけた
ら、気配を消して耳を澄ませる。鳥の声が聞こえ
たら、音の出どころを目と耳でひたすら探してい
く。そうした野鳥探しには、知識と経験、そして根
気が必要不可欠だ。とくに最初は、鳥の鳴き声
を聞き分けることすら難しいが、そのコツについて
岡部さんはこう話す。

「昔から親しまれている方法ですが、“聞きなし”と
言って、鳥のさえずりを人の言語フレーズに変え
て覚えます。例えば、夏鳥として人気のサンコウ
チョウは独特な鳴き声で有名で「ツキ ヒ ホシ
ホイホイホイ」という聞きなしで知られています。
自分なりに意味づけした音に変えておけば忘れ
にくいですよ」。

種類によっては、人の口笛に反応して鳴き返
したり、姿を現したりする鳥も。しかし、野鳥の多
くは警戒心が強く、鳴き声が聞こえても居場所ま
では突き止められない、ということも少なくない。
岡部さん自身、狙った場所で数時間粘った末、空
振りに終わることもあるというのが、「たえボウズ
だって、つまらないなんて思うことはないです」
と一笑に付す。

「単に野鳥を撮りたいのなら、都市郊外の丘陵
地や公園で狙ったほうが、実は簡単なんです。奥
多摩は、広大な森がフィールド。生物相は豊か
ですが、撮影効率という点ではかなり分が悪い。で
も僕の場合は、『自分で探して撮る』ということが
大切なんです。言ってみれば、動物園にいる鳥を
撮ったって何も意味がない。一人で森を歩き、鳥
の声を聞き、会いたい鳥の姿を追いかけている
と、自分が自然の一部になったような気分にな
ります。それは奥多摩で生まれ育った僕が、40歳
を過ぎて初めて知った感覚。野鳥が導いてくれ
たおかげで、奥多摩の魅力を日々、再発見でき
ているんですよ」。

鳥たちの美しいさえずりが、今日も優しく彼を
いざなう。未知なる森の奥へ奥へ、と。

※一年中ほぼ同じ場所に生息し、
季節による移動をしない鳥のこと

アオシ

ホオジロの仲間。「チヨ
ピーチョッ チチチ チリ
リ チツッ」と調子をと
りながら歌う



ベニマンコ

体の向きを変えながら
「ウィッフィッ」と地鳴き
する。漢字で書くと紅
襟子



カケス

他の鳥の鳴き声を真似
する物真似上手だが、音
段は「ジューイ ジューイ」
と鳴き叫ぶ



ジョウビタキ

冬鳥。漢字では「耐火
焚」。羽は銀髪、火焚は
火打石を叩くような甲
高い鳴き声が由来



オオルリ

日本三鳴鳥のひとつ。
様々な歌声を披露し、
口笛を吹くと鳴き返して
くれる



ゴジュウカラ

豊かな落葉広葉樹林で
は、時折、「フィーフィー
フィーフィー」と鳴き声
がする



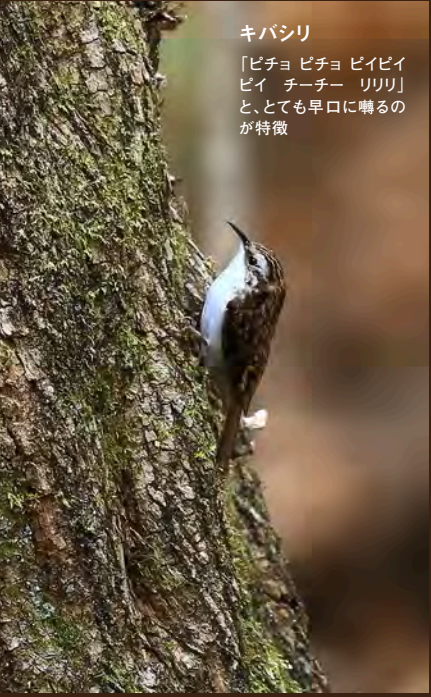
ミソサザイ

岡部さんが選ぶ美声
No.1の春告鳥。溪流の
ソングポストで声高らかに
歌い上げる



キバシリ

「ビチョ ビチョ ビィビ
ィィ チーチー リリリ」
と、とても早口に囀るの
が特徴



コマドリ

日本三鳴鳥のひとつだ
が、最近ではレアキャラ
に。鳥のいなささのよう
に力強く歌う



イカル

「ギョーキ コーキ」と
澄んだ鳴りが特徴。地
鳴きは「キョッキョッ
キョッ」と鋭く鳴く



クマタカ

絶滅危惧種の森の王
者。「ピッピッピエ」と
遠くまでよく通る声で鳴
く。写真は幼鳥



Bird Call Calling

小鳥と会話する、
バードコールの作り方



木の枝と ボルトネジ1本で 小鳥と話ができる!?

幼い頃から奥多摩の山間部が遊び場だったという“森の演出家”の土屋一昭さん。自然遊びのエキスパートとして活動する彼の特技の1つが、鳥と会話することだ。土屋さんの口笛は、一般的な口笛とも笛とも異なる独自のスタイル。口をすばませて、上の前歯と唇の間から息を細く短く吐き、繊細な音色を奏でる。目をつぶって聞けば、本物の野鳥との音色の差が分からないほど再現率は高く、奥多摩の森で吹けば、鳥たちがたちまちレスポンスを返してくれるという。「子どもの頃から鳥の声を真似していたら身に付いた技です。約10種類くらいの鳥は口笛で呼びだすこともできます。気性の荒いオオルリは縄張り意識が強く、「チュルチュルチュル」と鳴くと、一発で下りてくることも。狙いの枝にピタッと止まってくれるよう、呼ぶこともできます」と土屋さん。そんな鳥たちとのコミュニケーションを、素人でも極めて簡単に楽しめる方法がある。それが、木の枝とボルトネジ1本で作る“バードコール”だ。使い方は至って簡単。木に差したネジを回すと、摩擦音が発生。回転の速さや力加減で「キュルキュル」「ピーピー」という変化に富んだ音色を出すことが可能だ。「森の中はもちろん、家の中で鳴らしても野鳥の反応を楽しめます。都会でもスズメやメジロ、ウグイスなど色んな鳥が近づいてきたり、鳴き返してくれますよ。こうした自然体験を通じて、子どもも大人も五感が研ぎ澄まされます。バードコールは、片手に収まるコンパクトサイズ。常に持ち歩いて、野鳥たちとの会話を気軽に愉しんでもらいたいですね」。



Step1 材料を用意する

必要な材料は、木の枝と丸カンネジ（径6mm）のみ。木はなんでもOKだが、よく乾いていることが条件。最低3ヶ月は乾かしていること。今回は、奥多摩のヤマザクラの木を使用。やや硬いためバードコール向きで、色の経年変化も楽しいオスメの木材だ。



Step2 ドリルで穴を開ける

木の枝は5cmくらいの長さに切っておき、切り口の芯の部分にドリルで穴を開けていく。丸カンネジの径よりも0.5mm小さいドリル刃を用い、少し小さめに穴を作る。穴の深さは2〜3cm程度に。



Step3 ネジを差し込む

木に開けた穴に、丸カンネジを差し込んでいく。穴の径よりも丸カンネジのほうが太いため、力を入れてねじりながら入れていく。締めては緩め、締めては緩めを繰り返すと、少しずつ金属音が鳴るようになる。



Step4 完成

木とネジをこすり合わせるように回すと、次第に鳥の鳴き声に変化。ネジの向きや力加減を微妙に変えることで、音色に変化をつけることもできる。音があまり鳴らなくなってしまう時は、チョークの粉を穴に入れたと復活する。



早速、森にでかけて鳴らしてみよう。春秋のシーズン、とくに早朝は、レスポンスしてくれることが多く、オスメだという。

教えてくれた人



土屋一昭

鳥と会話をし、ヤマメを素手で採る野生児。「森育」「食育」「人育」をテーマにした「森の演出家」として活動。青梅市・御岳と奥多摩町・古里にある古民家を拠点としながら、古き良き日本文化と自然体験を行うサービを提供。現在はTVや雑誌などメディアへの出演や、大使館・自治体からの依頼で全国各地を飛び回る。



神庭神楽連

毎年8月の第一土曜日、神庭山祇神社で行われる「神庭かぐら」。東京都無形民俗文化財に指定された民俗芸能で、獅子舞をはじめ毎年6〜7度を上演。小学生から70代まで10名のお囃子が、演目を盛り上げる。

奥多摩納涼 花火大会 花火師&主催者の みなさん

奥多摩山山頂から約1000発の花火を打ち上げる「奥多摩納涼花火大会」。山の中で上がる花火のため、打ち上げ音が周囲の山々に反響し、迫力のある「音体験」を楽しめる。あきる野の花火師たちが長年担当。



Ogouchi Banban Company (OBC)

奥多摩町小河内のまちおこし団体。「子ども参加型まちおこしエンターテインメント」をうたうパフォーマンス部門では、奥多摩にちなんだ歌を作り、子ども達と一緒に歌って踊るライブ活動を町内外で実施中。



防災行政無線放送 放送室のお二人

山間に集落が点在する奥多摩町では、各家庭に配布された受信機で防災行政無線放送を行う。朝夕の定時放送は、総務課臨時職員の2人の女性がアナウンスを担当。毎月のBGMを、朝夕それぞれ1曲ずつセレクトしているとか。



コールやまぶきのみなさん

1977年に「お母さんコーラス教室」としてスタートした奥多摩女声合唱団。現在は、約27名のメンバーがあり、毎週火曜日に奥多摩町福祉会館で練習に励んでいる。1年おきにコンサートを開催。



歌手 原大五郎さん

奥多摩生まれ奥多摩育ちの歌手。西多摩地区を中心に、地元のお祭りやイベントで歌って踊ってのパフォーマンスを披露。オリジナル曲「感謝」「奥多摩踊り」「奥多摩よさこい二十一」が収録されたCDを発売中。

Okutama Music Lovers



奥多摩清流太鼓の女子たち

「四季奥多摩」「清流橋の集」など奥多摩にちなんだ曲目を、和太鼓を使って力強く演奏。毎週水曜日の夜、旧古里中学校体育館にて練習中。現在のメンバーは25名。そのうち小学生から高校生までの女子が11名。



ミュージシャン 船越章太郎さん

奥多摩駅舎2階の融合カフェ「Port Okutama」および、溪流沿いの「蕎麦太郎カフェ」店主。2016年よりミュージシャン活動を再開し、3ピースロックバンド「ジョンの指」のボーカル&ギターを務める。音楽とエンタメで町おこしを画策中。

南水川のお囃子

毎年8月第2土・日曜日の羽黒神社の例祭にて開催される。曲目は、11〜12程度。メンバーの平均年齢は40代と、高齢化が進む奥多摩町では年若いほう。山車ばやし、居ばやし（屋台ばやし）の2種類がある。



奥多摩で音を奏でるひとびと

Hear The Water Entertainment

滝音アンサンブルの幻惑

滝に魅せられて十数年。日本全国の滝巡りを続ける“滝ガール”こと、坂崎絢子さん。「滝は地球が創り出した芸術作品」と語る彼女は、美術館でアートを観るかのように滝鑑賞を楽しんでいるという。坂崎流の滝鑑賞術における重要な要素の1つが、滝音だ。「あれだけ轟音なのに滝の音をうるさい、不快だと感じる人は不思議といませんよね。私は少なくとも30分間は、滝の前で耳を澄ませゆったりと過ごしています。そうすると、内側からどんどん元気になっていく。自然の音を持つ「1/fゆらぎ」という波動が滝にもあり、癒し効果があると言われていんです。それと、人間の約60〜70％は水分。滝音に身体が共鳴するからリラックスできるのかも」。滝音を聞く時は、両耳の前に手を当てて耳を澄ませる。すると、滝音だけがクリアに聞こえ、まるで滝の中に入っているような不思議な感覚になるという。「水の音って、色々な音の集合体なんです。だから、手前はチョロチョロ、後ろではザーザー、右側はコロコロという具合に一つ一つ分解して、擬音化してみる。そうすると聴覚がどんどん敏感になって、聞き分けに集中するだけで癒されていきます。それとオススメなのが、滝を人格化してみること。目で見て音を聞き、滝を人に例えてみるんです。元気な男の子、妙齡の女性とか。滝にも個性があるから面白いですよ」。奥多摩町にある人気の滝名所「海沢三滝」は、坂崎さんも足繁く通うお気に入りの場所だ。三滝のうちの1つ、三ツ釜の滝の滝つぼでプチ瞑想し、今回、あらためて感じた印象とは？「森に囲まれた黒光りした岩々と豊富な水量、そして生き生きした滝音が印象的。熟練の職人さんのような、涼い男性のイメージですね」。

坂崎絢子

日本全国の滝巡り歴15年以上。国内外会わせて、数百の滝訪問を実現。平日は会社員として働きながら、週末は「滝ガール」として活動中。2013年より自身の活動記録を掲載したウェブサイト“Takigirl.net”を運営。滝から地球の平和を考える“Waterfall & Peace”をテーマに、滝の楽しみ方の案内役を務める。
<https://takigirl.net>

滝音の嗜みかた

01 両耳に手を添える

耳の前に手を当てると集音マイクのように、いつもとは違う音の聞こえ方になる。滝に背を向けて耳を澄ませると、滝音だけが鮮明に聞こえ、複数からなる水音を楽しむ。

02 擬音化する

ザーザー、チャラチャラ、サラサラなど滝の音を擬音化しながら聞くことに集中する。そのうちに耳が敏感になり、鳥や虫の声など滝以外の音も聞き分けできるようになる。

03 瞑想する

「1/fゆらぎ」を持つ滝音は、瞑想のBGMに最適。滝つぼの水面を見ながら10〜15分ほど瞑想すれば気分爽快。自分が水滴になったつもりで滝を滑り落ちる想像をする「一滴瞑想」もオススメです。

奥多摩のオススメ滝スポット

海沢三滝

多摩川に合流する海沢谷の上流部に懸かる3つの滝。三ツ釜の滝、ネジレの滝、大滝がある。海沢園地から三滝を巡る約90分のハイキングコースが人気。

百尋ノ滝

川苔山の山中、日原川へ流れ込む川苔谷上流部にある、落差約40mの名瀑。川海苔山登山コースとして人気。冬場は庄巻の氷瀑になる。

奥多摩町に暮らす

都心から約1時間半、東京最西端に位置する奥多摩町。近年、自然豊かなこの町に、移り住む人が増加中だ。自分らしい生き方を謳歌する移住者へのミニ・インタビュー。

File 01 井田孝之さん・直子さんファミリー



2015年までは川崎に住んでいたという井田さんファミリー。紆余曲折を経て奥多摩町のいなか暮らし支援住宅制度に応募。15年住み続ければ無償で土地と家がもらえるという制度を利用し、奥多摩ならではの生活を満喫している。孝之さんは言う。「僕らは大自然の中で暮らすということも求めたと同時に、都会の便利さも享受したいという気持ちがあった。そうなるも奥多摩は絶妙の場所なんですよね。いかにも観光地という場所は嫌だったんで、その条件にも奥多摩はぴったりでした」。孝之さんは始めに出る一方、直子さんは夢だったカフェを始めることもできた。空き家バンクで見つけた店舗は雰囲気バツグンの古民家だったため、思い切ってこれを購入。夫婦でアイデアを膨らませてスタートさせた「茶屋榎」は、ほどなく常連さんたちが集まる個人的なスポットとなった。直子さんは言う。「お店を始めたことでたくさんの方と知り合えたことが何よりの財産。これから人との出会いが楽しみで仕方ないんです」。



茶屋榎

東京都西多摩郡奥多摩町 818

もとは著名なクライマー・山野井孝史、妙子夫妻が住んでいたという古民家を改修してカフェに。夫婦2人の趣味とシンクロするように、いつの間にか、バイカーの常連さんたちが集うようになったという。

Welcome to

OKUTAMA TOWN

東京の森林へ移住定住のススメ

都下での生活と自然豊かな環境を両立する奥多摩町では、移住・定住者を迎えるために、さまざまな支援を行なっている。住宅支援や子育て支援制度も充実しており、ファミリー世帯にも暮らしやすい町だ。

若者定住応援補助金

奥多摩町で住宅を新築、増築、改築、購入された方に、補助金を交付。事業費が50万円以上、事業費の2分の1以内、最大で200万円の補助。事業を実施後、1年以内のもの、補助等を受けることができる回数は1回のみ。
対象者：年齢45歳以下の夫婦又は50歳以下の者で子ども（高校生以下の者）がいる世帯、若しくは35歳以下の単身者。

住宅資金借入の利子補給

奥多摩町に定住を目的とした住宅を新築、増築、改築、購入された方に、資金借入に対する利子補給を実施。融資金額500万円以上で償還期間が10年以上、借入利率の2分の1、年額30万円以内（給付期間36か月）。
対象者：年齢45歳以下の夫婦又は50歳以下の者で子ども（高校生以下の者）がいる世帯、若しくは35歳以下の単身者。

お問い合わせ：奥多摩町定住応援総合窓口 Tel.0428 83 2310 <http://www.town.okutama.tokyo.jp>

子育て支援

【乳幼児】保育園にに係る費用の一部を助成、町内保育園に通園するお子さんの保育料を全額助成、医療費（保険適用分）を全額助成。

【小・中学生】入学時に係る費用の一部を助成。給食費、通学費、医療費（保険適用分）、中学生制服等購入費を全額助成。多子家庭またはひとり親家庭の学童保育の育成料の全額または一部助成。

【高校生】進学時に係る費用の一部を助成。通学費（定期代）、医療費（保険適用分）を全額助成。通学の送迎にタクシー料金の一部またはガソリン券を助成。

その他

いなか暮らし支援住宅、空家バンク制度、安く家が借りられる町営若者住宅、多子家庭の助成制度など、ほかにも定住および子育てにまつわるさまざまな支援を行なっている。

Edit & Text & Photo: Yukiko Soda [miguell] Piroshi Utsunomiya [miguell] Art direction: Atsushi Kodani Illustration: Toshiyuki Hirano

発行：東京都奥多摩町 <http://www.town.okutama.tokyo.jp> 編集&制作：株式会社ミゲル 〒198-0101 東京都西多摩郡奥多摩町大丹波640 miguell@dg8.so-net.ne.jp <http://www.miguell-web.info>
2018年9月発行 本誌は奥多摩町内の各観光施設、JR青梅線各駅構内、都内協力店などで配布しています。店頭などで無料配布にご協力いただける施設を募集中です。ぜひお問い合わせください。
Cover story: 奥多摩の森に暮らす、バードウォッチャー憧れの夏鳥、サンコウチョウ。長い尾羽を持つ、ユニークで美しい姿からインスピレーションを得て、イラストレーションを作成。「ツキ ヒ ホシ ホイホイホイ」という独特な鳴き声がある。

